

「別室」と「特別室」に見る音変化の規則性

ロンドン大学 黒沢 晶子

I はじめに

漢字のうち、入声k及びtで終わるもの、即ち現在の日本語で「き」「く」「ち」「つ」終わりの2拍の字は、後続音によって、「き」「く」「ち」「つ」の母音が脱落し、後続子音との同化が起き、表記が「っ」となる。入声kでは、後続音がkの場合、「学校」「学期」のように母音が脱落し、子音同化が起きるが、それ以外の音が後続する場合は、原則として「学生」「学費」「学問」のように、母音は無声化することとどまる。また、入声tでは、後続音がk, s, t, h(p)だと「実行」「実際」「実態」「実費」のように母音の脱落、子音同化が起こるが、それ以外の後続音では「実現」「実像」「実用」のように、母音は無声化だけである。この規則性は大多数の語に当てはまるが、少数の例外がある。この例外のひとつとして、「入声k, t音の字が複合語の切れ目に来た場合」がある。例えば「特別室」「熟処理」「密出国」などである。(黒沢1994)

ここで例外として扱った上記のケースが、実は初めに述べた規則の例外と言うよりも、それはそれでひとつの規則性を持っているのではないか、という仮説を立て、主として漢字3字の音読語で「入声k, t音の字が複合語の切れ目に来た場合」に焦点を絞り、例を集めて考えてみた。(注1)

また、漢字2字から成る語の中にも、2字目が接尾語として働いている場合などに、初めの規則の例外となる(例:「食気」^{しょくけ}「質的」^{しつてき})傾向が見られたので、2字語もさらに例を集めてみた。

II 資料

日本放送協会編(1966) 日本語発音アクセント辞典

日本放送協会編(1985) 日本語発音アクセント辞典 改訂新版

笠間書院(1978) 日本語尾音索引 (岩波国語辞典第2版の逆引き)

III 調査の範囲と方法

常用漢字1945字のうち、k(き38字・く180字)、t(ち7字・つ93字)(計318字)で終る入声音の字について、k, s, t, hで始まる字音が続いた主として3字の字音語を、上記資料から抜き出した。黒沢(1994)の調査結果に基づき、2字の字音語で原則として母音の脱落が起こる組合せ(k+k, t+k, s, t, h(p))に焦点を合わせ、3字の複合語、派生語の切れ目に来た場合、母音が脱落するか、無声化にとどまるかを調べた。また、4字以上の語でも、●・○・○○(熱核反応)、○○・●・○○(同一波放送)、○○・○●・○(水上生活者)のように、切れ目の前または後に来るのが1字であるものも対象とした。

「特別・室」型の語、つまり入声k, t音の字が2字目にあるものは、普通の辞書では探しにくい。これをある程度網羅的に調べるために、まず、k, s, t, h音で始まる字音を常用

漢字表から抜き出し、その字音109種（か、かい、かく……ほう、ほく、ほん）が入声k, t音の字の後に来る3字以上の語を『日本語尾音索引』から拾った。（例：ツシ・ツブクヨシ=植物質）また、「熱・処理」型の語は、普通の国語辞典から探すことができるが、今回は、発音が明記されている『日本語発音アクセント辞典』から拾うことにした。『日本語尾音索引』から採った語についても、『日本語発音アクセント辞典』で可能な限り、発音を確認した。

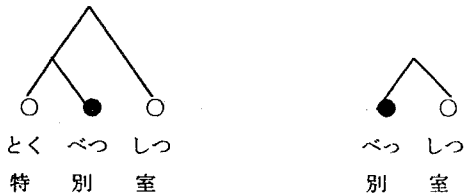
また、複合語の切れ目がどこにあるかの確認には、広辞苑第四版電子ブック版を使った。

2字語については、『日本語発音アクセント辞典』から常用漢字中の入声k, t音の字318字で始まる見出し語のうち、原則として母音の脱落が起こる組合せ（k+k, t+k, s, t, h(p)）のものを拾い、例外がどんなもので、どのくらいあるか調べた。

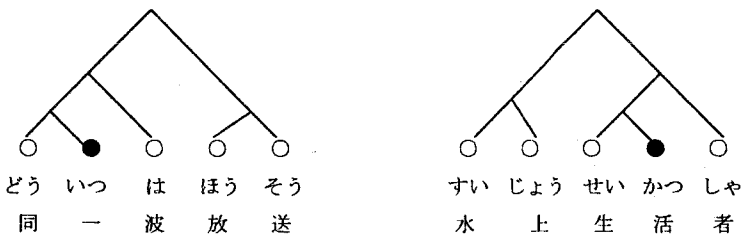
IV 「別室」（母音が脱落）と「特別・室」（母音が無声化）

一派	出所	物質	別席	別法
同一波放送	派出所	植物質	特別席	特別法

上記の語の構造は、次のように表せる。



「同一波放送」「水上生活者」の「同一波」「生活者」の部分は、下記のように「特別室」と同じ構造を持つ。



上記の語例を比べてみると、●○型で母音の脱落が起こるのに対し、○●・○型では同じ字の母音は脱落せず、無声化するにとどまっている。○●・○型でこれが規則的なものと言えるかどうか、語例を集めてみた結果、次のように、例外はあるものの、十分規則性があることが分かった。

◆「特別・室」○●・○型—主として、●の2拍目の母音は脱落せず、無声化にとどまる

	+脱落	-脱落	±脱落	計
k + k	1	16	11	28
t + k, s, t, h (p)	2	60	0	62
計	3	76	11	90

+脱落：母音が脱落　　-脱落：母音が脱落せず、無声化　　±脱落：脱落、無声化両方あり

「特別室」と「別室」を比べると、「別室」では「別」と「室」の熟合度が高いのにひきかえ、「特別室」では「特別」と「室」が複合してできた語、という意識があり、「特別」と「室」の間に切れ目がある。「室」は語ではなく、形態素だが、接辞的に使われる、という点で、ある程度の独立性を備えている。そのような接辞的なもの、あるいは「法」や「質」のように語のレベルでも使われるものに、独立した語が前接する場合、その二者の間には境界がある、と意識されるのではないだろうか。「特別室」の発音が「トクベツシツ」ではなく、「トクベツシツ」になっていることは、その境界意識の反映である、と言えないだろうか。

◆「特別・室」○●・○型 語例

*：『日本語発音アクセント辞典』『日本語尾音索引』に記載のないもの。分類は内省による。

±?：『日本語発音アクセント辞典』には無声化の記載しかないが、内省で、母音が脱落しやすと思われるもの

k + k :

+脱落：両脚規

-脱落：主力艦、体育館、人格化、本格化、視覚化、好角家、結核菌、陰極管、組織化*、
枢軸国、安息香、駆逐艦、既得権、三幅対、腓腹筋、括約筋、内陸国

±脱落：多角形、三角形、四角形、旅客機、万国旗、各国間*、著作家、著作権、音楽家、
音楽会、生殖器、水族館

t + k, s, t, h (p) :

+脱落：武芸十八般、吐月峰

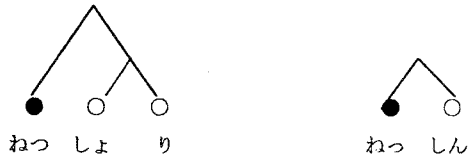
-脱落：同一波放送、同一視、統一的、千日紅、背日性、向日性、百日草、全日制、
遠日点、籐八拳、優越感、生活費、生活苦、生活給、水上生活者、間欠泉、議決権、
未決囚、清潔法、多血質、敗血症、貧血性、偃月刀、接骨師、檢察官、警察権、
警察署、檢察庁(±?)、自殺的、実質的、物質的、切実感、現実的、派出婦、
派出所、技術者、技術的、親切氣(注2)、常設館、建設的、季節風、小説家、
到達点*、出发点、念仏宗、動物界、景物詩、風物詩、動物質、植物質、造物主、
植物性、差別的*、特別区、告別式、特別市、特別席、特別職、特別法、始末書、
機密費、効率化*、分列式

±脱落：建設中*

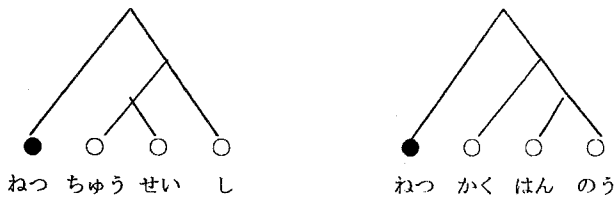
V 「熱心」(母音が脱落)と「熱・処理」

一転 八方 熱気 熱中
 一転機 八方位 熱気球 熱中性子

上記の語の構造は、次のように表せる。



「熱中性子」「熱核反応」は4字語だが、構造は下記のようになり、「熱」がそれに続く語に大きく係るという点で「熱処理」型に準じると考えられよう。



上記の語例を比べてみると、●○型で母音の脱落が起こるのに対し、●・○○型では同じ字の母音は脱落せず、無声化するにとどまっている。○●・○型でこれが規則的なものと言えるかどうか、語例を集めてみた結果、次のように、そうでない例もかなり多く、「特別・室」型の語に比べて、仮説で考えたような規則性があるとは言い難いことが分かった。

◆「熱・処理」●・○○型—●の2拍目の母音は、無声化と脱落両方の場合がある。

	+脱落	-脱落	±脱落	計
k+k	5	8	2	15
t+k, s, t, h (p)	19	16	1	36
計	24	24	3	51

数詞として働く数字は、後続の語との整合度も高く、従って母音が無声化しやすいとも考えられる。そこで、仮に上の集計から数字「六」「一」「七」「八」を含む語を抜いて数えてみると、次のようになる。

	+脱落	-脱落	±脱落	計
k+k	4	8	2	14
t+k, s, t, h (p)	11	12	0	23
計	15	20	2	37

こうすると、母音が脱落しない語例が、脱落するものよりやや多くなる。しかし、それでも、「熱・処理」●・○型は、「特別・室」○●・○型のような規則性は認められない。●・○型の●は、○●・○型の●より、後続の語との熟合度が高い、と言えるかもしれない。

◆「熱処理」型 語例

k+k:

+脱落: 赤褐色(注3)、赤血球、直滑降、白血球、六歌仙

-脱落: 悪感情、各会社*、核開発*、核拡散、核家族、角距離、逆回転、
副級長、服加減、複関税

±脱落: 逆効果、逆光線

t+k, s, t, h (p):

+脱落: 一個人、一周忌、一生涯、一親等、二世紀、一昼夜、一直線、一直角、活火山、

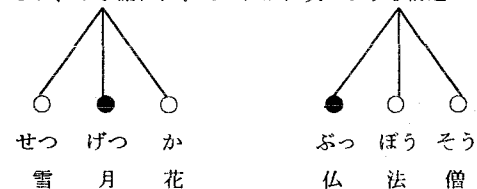
褐鉄鉱、月世界、殺風景、実社会、実生活、突拍子、別世界、別天地、仏舍利、没交渉

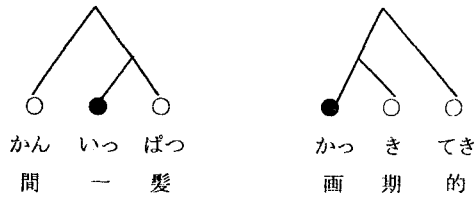
-脱落: 一転機、七福神、七変化、八方位、熱輻射、熱化学、熱核反応、熱核兵器、熱気球、
熱器具、熱処理、熱中性子、別勘定、別行動、没趣味、密出国

±脱落: 一見識

上の語例の1字目を見ると、「+脱落」のものは、数字を除くと、1字目の字に「赤」^{せき}「直」^{ちよく}「活」^{かつ}「殺」^{まっ}「突」^{とつ}のように、独立性の低いものが多い。一方、「-脱落」のものは、1字目の字に「悪」「核」「角」「逆」「熱」等、単独でも使える独立性の高いものか、「各」「副」「服」のように、接辞的に使われるものが多い。しかし、「別」「没」の字は、「+脱落」の語にも「-脱落」の語にも使われているし、「密」のような独立性の低い字で「-脱落」の語に使われているケースもある。従って、1字目の字の独立性がその字の母音の脱落の如何にかなり関係があるとは言えても、それが絶対的な、あるいは単独の原因だとは言えないようだ。

なお、3字語には、このほかに次のような構造のものがある。





「雪月花」○・●・○型、「仏法僧」●・○・○型のように、独立した形で3字が結びついているものは例がほとんどなく、母音の脱落に関してその傾向を見ることはできなかった。

また、「間一髪」○・●○型、「画期的」●○・○型は、●○の部分は2字語と同じなので、2字語に準じるものとした。

VI 「物的」(a:母音が脱落—一般的)と「質的」(b:母音が無声化—例外的)

2字語について、常用漢字を対象として調べた結果は、次の通り、2拍目の母音が脱落するものが圧倒的に多く、その規則性が確認された。

	+脱落	-脱落	±脱落	計
k+k	232	15	11	258
t+k, s, t, h(p)	809	11	1	821
計	1041	26	12	1079

◆2字語 語例

k+k:

+脱落(1): 借金、食間、悪化、弱化、学界、客観、直感、学科、学課、俗界、着工、

-脱落(1): 益金、駅間*、液化、劇化、劇界、敵艦、壁間、各科、各課、各界、各項、

+脱落(2): 脚氣、^{かっけ}国会、木管……

-脱落(2): 食氣、^{しよくけ}毒氣、^{どくけ}肉塊、^{よくけ}脈管、欲氣

±脱落: 激化、識見、俗氣、敵国、的確、適格、角界、菊花、幕下、復啓、副官

t+k, s, t, h(p):

+脱落: 別種、失調、疾患、^{ねつき}熱氣、^{ぶっぼう}仏法 [仏の教え]、喫茶、失権、失笑、失点、物的

-脱落: 乙種、室長、質感、^{ねつけ}熱氣、^{ぶっほう}仏法 [フランス法律学]、^{しち}質権、^{しち}質商、^{しち}質店、質的、

(熊公) 八公、靴工

±脱落: 七転 (八倒)

「氣」の音である「キ」と「ケ」は、音でありながら、「氣を付ける」「火の氣」のように1字だけでも用いられ、半ば和語のように使われている。この「キ」と「ケ」が他の音読字に

後接して用いられる場合、「キ」は次のように前接の入声音の母音が脱落するのが普通だが、

「ケ」は無声化の方が多い。

気：^き+脱落：一^{かっ}気、客^{きゃく}気、活^{かつ}気、血^{けつ}気、節^{せつ}気、熱^{ねつ}気 一脱落：^{ぞく}俗^{ぞく}気
 け：^け-脱落：食^{しょく}気、俗^{ぞく}気、毒^{どく}気、熱^{ねつ}気、欲^{よく}気 +脱落：^{かっ}脚^{かっ}気、^{ぞっ}俗^{ぞっ}気

「気」は、和語に後接する例が非常に多い。(塩^{しほ}気、酒^{さけ}気、若^{わか}気、吐^つき^げ気、男^{おとこ}気、瘡^{かさ}気、風^{かぜ}気、怖^{おそ}じ^お気、腰^{こし}気、虫^{むし}気、水^{みづ}気、怖^{おそ}気、土^{つち}気、呆^{あほう}気、人^{ひと}気、健^{けん}気、女^め気)

和語に後接する語例の多いことが、「気」を和語のようなものと類推させている、とも言える。そのため、入声音が前接するときも、母音の脱落が比較的起こりにくいのではないだろうか。

他の「一脱落」とそれに対応する「+脱落」の例を比べると、「一脱落」の語の1字目は、「+脱落」の1字目よりも概して独立性が高い、ということ可言えよう。「駅間」は「駅」の間だが、「食間」は「食事」の間。「液化」は「液」になることで、「悪化」は「悪く」なること。「劇界」は「劇」の世界だが、「学界」は「学問」の世界。「質的」の「質」は単独で使えるが、「物的」の「物」は特殊な意味を除いて、独立した語としては使われない。必ずしも「一脱落」の語の1字目が常に語のレベルで、「+脱落」の1字目がいつも形態素のレベルというわけではない。「食」「悪」「学」もまた、語のレベルでも使われる。ただ、「食間」は「食」の間と言うよりは「食事」の間、「悪化」は「悪」になると言うよりは「悪く」なることだと言った方がいい、という程度のことである。また、「一脱落」の「各科」「各課」などの「各」は単独では使えない。しかし、「各」は接辞として使われるため、「学科」「学課」よりも「各科」「各課」の方が語としての熟合度が低い、とは言えるだろう。

◆ k + h (p)

k + h (p) の組み合わせでは、普通「き」「く」の母音は無声化にとどまるが、字によって脱落する例を持つものがある。「独」「百」「北」「六」「匹」である。

	+脱落	-脱落	±脱落	計
k + h (p)	7	140	0	147

+脱落：独歩、独法；百発（百中）、百般；北方★；六方、六法；匹夫（の勇）

-脱落：独白；百八（煩惱）、百弊；北辺

★：今回の資料には記載がなかったが、黒次1994の資料『新明解国語辞典第二版』にあったもの

【参考】k + h (p) の3字語は、次の通り、母音が脱落する例はない。

適・不適、格・変化、菊・半切（紙）、逆・比例、複・比例、複・複線、略・本暦

VII 結論

以上で考察したように、3字語、2字語の入声音の母音が脱落するか無声化にとどまるかは、次の諸要素によってほぼ決まるものと推定できる。

1 音声上の要素：入声 k, t 音の字が k, s, t, h (p) で始まる音に続くかどうか。この環境にあれば、原則として、入声音の2拍目の母音は脱落する。

2 形態上の要素：(2拍目の母音が脱落または無声化すべき)入声音を含む部分がどの程度独立性が高いか。独立性が高いほど、母音は脱落しにくい。3字語が○●・○型の構造を持っていれば、初めの2字で構成される語は独立性が高いため、●の2拍目の母音は脱落しにくい。また、3字語が●・○○型の構造である場合、●の部分の独立性は、語、形態素かつ接辞、形態素の順に低くなる。そして、その順で●の2拍目の母音は脱落しにくくなる。●○型の2字語の多くは、語としての熟合度が高く、●の2拍目の母音は脱落するのが普通だが、●の独立性が高ければ、母音が無声化にとどまることもある。

3 語彙上の要素：後接する部分が音読されているにも関わらず、和語のように意識され、使われているか。和語の場合、その前に来る入声音の2拍目の母音は脱落しにくい。

4 通時的変化：1～3が共時的要素であるとすれば、音声の時代による変化という通時的要素も考えなければならぬだろう。(例：赤褐色：せきかつしょく→せっかつしょく；角界：かくかい→かくかい、かつかい)

話し言葉で、丁寧な発音をしないときに起こる発音の縮約が、どの程度固定的なものになっていくかは未知数である。「核家族」は「カクカゾク」(クは無声化)だが、「カッカゾク」(クの母音は脱落)と発音していることも多いはずだ。「検察庁」は「ケンサツチョー」だが、ぞんざいな話し言葉では「ケンサッチョー」と言っているのではないか。ただ、これがまず、発音辞典で認められ、次に日本語の表記(国語辞典など)に反映されるには、時間がかかるだろう。表記はいつも音声の変化の後追いだから、共時的には、発音と表記の間にはギャップがありうるわけである。

注

(注1)：音読語に絞ったのには理由がある。和語や外来語が入声 k, t 音の字に後続する例が少数あるが、「^{きやくがわせ}逆為替」「植物ホルモン」のように、母音は脱落しないことが多い。これは、和語、外来語が後続する、という条件のためにそうなる可能性が高いので、母音が脱落しないのが複合語の切れ目に来たからなのかどうかを見るには不適当だと判断した。

(注2)：音読の「^き気」が、あたかも和語であるかのように連濁を起こしている。

(注3)：黒沢1994では、「無声化と脱落の間を揺れているもの」になっている。資料とした『新明解国語辞典第二版』(1972)では、「せきかつしょく」の見出し語のもとに「口語では「せっかつしょく」としている。

【参考文献】

Clark, J., Yallop, C. 1990 "An Introduction To Phonetics & Phonology" Blackwell

Crystal, D. 1987 "The Cambridge Encyclopedia of Language" Cambridge University Press

Ito, J., Mester, R. 1986 "The Phonology of Voicing in Japanese: Theoretical Consequences for

Morphological Accessibility" Linguistic Inquiry, Volume 17, Number 1, Winter 1986,

49-73

- Ladefoged, P. 1993 "A Course In Phonetics Third Edition" Harcourt Brace College Publishers
- 門脇誠一、高瀬（黒沢）晶子 1983 『初級日本語』（上下）韓国 雲亭文化社
- 黒沢晶子1994 「漢字音における母音の脱落現象と教え方」『第7回日本語教育連絡会議報告
発表論文集』 第7回日本語教育連絡会議事務局
- 高松政雄 1986 『日本漢字音概論』 風間書房
- 土岐哲 1977 「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28号
- 土岐哲、村田水恵 1989 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ12 発音・聴解』
荒竹出版
- 中田祝夫 1982 「日本の漢字音」『日本語の世界4 日本語の漢字』 中央公論社
- 沼本克明 1986 『日本漢字音の歴史』 東京堂出版
- 日本語教育学会編 1982 『日本語教育事典』